

日本語の文構造と意味変化

きたざき ゆう ほ
北崎 勇帆 (高知大学)

1 はじめに

- これまでやってきたことと、そこから得られる、これからやりたいことの話。
 - これまでやってきたこと①…命令形式の条件形式化
 - これまでやってきたこと②…意志・推量形式の非終止用法
 - これからやりたいこと…タイトル
- 資料
 - A: 中世・近世における従属節末の意志形式の生起 (2020/12 近代語学会)
 - B: 意志・推量形式の従属節への取り込み (2019/7 中部日本→2021/2 メ)
 - C: 意味変化の一方向性とその逆 (2019/12 ナロック科研集会→2021/2 メ)
 - D: 近世における従属句の階層性 (2020/9 通時コーパスシンポ→2021/3 メ)

2 これまでやってきたこと①…命令形式の条件形式化

- (1) a. 犬であれ猫であれ、手間がかかることには変わらない。
b. もういっぺん言ってみろ、怒るぞ。
- 逆接仮定条件も順接仮定条件も、成立の過程に二文連置の再分析が想定される (北崎 2019b など)。
 - (2) a. なかのきみ、「われ、かくて、いみじきさまを見えぬるは、[自身の悲惨な姿を見られてしまったことが] さもあらばあれ。ことよにやはへたる。かくなしたるにこそはあめれ。これを、かくすと見えぬるは、いみじくかなしきこと。…
(うつほ物語・蔵開下 [10C 後半] 644-2)
 - b. 人のそしりはさもあらばあれ、[あなたは] とく / \ まいらせ給へ
(古今著聞集巻8 [1254] 265-8)
 - c. その証拠は余所までも無い、日本にも多い。余の人は然も有らば有れ、〈Yo no fito ua famo araba are,〉ケイユウが門徒に限っては今宵六波羅へ押し寄せて討ち死にをせう
(天草版平家物語巻2-4 [1592 刊] 40- 天平 1592_02004,8370)
- (3) a. [命令 (放任) 文 (…は) さもあらばあれ]。
b. [命令 (放任) 文 (…は) さもあらばあれ]。[対比的な後続文 …]。
c. [逆接仮定条件文 [条件節 (…は) さもあらばあれ], [主節 …]]。
- (4) a. [誘いを断られて] 入道腹ヲ立テ、「参ルマジキカ。今度申切レ、相計フ旨有」ト、ニガノシク宣タリ。
(延慶本平家物語1本 [13C] 上 42-6)
- b. [饅頭の代金を払えと言われて] (大名)「此御せいたうたゞしひおりから、そのつれな事をいふてめいわくするな、よつてみようちはなすほどに「刀ニてヲか

くる (虎明本狂言集・饅頭 [1642 写] 40- 虎明 1642_02030,13150)

- c. 西方じやう土は絵図でもみやつつらが、仏をはじめ、みなノ金ばかりで、しやばの金ぎんふつていな目から見れば、どふやら結構らしけれど、其中に「お前が」住でみやれ、「お前が」半年もたゝぬにあきはてゝ、やつぱり娑婆が恋しく成であらふ (当世穴さがし巻2 [1769 刊] 204-10)

- (5) a. [命令文 申切レ]。[結果予告 相計フ旨有]。
b. [[条件節 命令形]、[主節 相計フ旨有]]。

- この「命令形式の条件形式化」は、意味変化の一般的傾向である (はずの)「間主観化」(intersubjectification)、「対人化」(interpersonalization) に逆行する (小柳 2016a)。

3 これまでやってきたこと②…意志・推量形式の非終止用法

- 逆接仮定条件を示す複合助詞に、「(よ) うと」「(よ) うが」の一群がある (北崎 2019a)。文末に生起する意志・推量の形式が接続助詞を構成するという点においても、命令形式と相似的である。

- (6) a. [木曾は]「今ハ万事思サマナレバ、内ニナラムトモ院ニ成ムトモ我心也。但内ハ小童也。又院ハ一日見シカバ小法師ナリ。内ニ成ムトテ童ニモ成タクモナシ。院ニ成ムトテ法師ニモイカナラム。関白ニヤ成マシ」ト云ケレバ、

(延慶本平家物語 4 [13C] 下 172-16)

- b. 能^{ヨク}レ利害ハ、富貴ニセウトモ貧賤ニセウトモ、マ、ナコソ、王ヨ

(史記抄・范蔡列伝 [1477] 3-302-11)

- c. 木曾大きに腹をたてて、我わ信猿の国を出た時から、方々の合戦をしたれども、まだ一度うしろも敵に後を見せねば、帝王でござらうとも <gozarō tomo> ままよ、甲を脱ぎ、弓弦をはづいて、降人にはえこそ参るまじけれ

(天草版平家物語巻 3-13 [1592 刊] 220-14)

- d. 身^(敵力)な^カどが国で、国主をうつたる物は、□打でござらふが。又打でござらふが。又□ノ打であらふが。一るいのねをたやす。(けいせいぐぜいの舟[1700 演]344 下 2)

- 古代語のム系助動詞は (命令形とは異なり) 非終止用法を持つので、これは「主観化」(subjectification) の反例とは言い難いが、中古ではム系助動詞を包含しないトモ節の接続の拡張の事例としては注目に値する。

4 これからやりたいこと…文構造と意味変化

- 以上のことを踏まえて、新たに湧いてくる問題いくつか。
- 「従属節の階層」の歴史について
 - a. ウ類が入るか否かは、存外流動的なのではないか?
 - b. それを踏まえたそもそもの「階層」の歴史の記述が必要で、
 - c. 一般的な傾向はあるか?
- 「意味変化の一方向性」と機能変化の関連性について
 - a. 意味変化 (いわゆる主観化・間主観化) と機能変化 (cf. 条件形式化) は別個の変化だが、

正方向も逆方向も必然的に連動するのではないか？

- b. 支配的傾向の逆が、まとまって起こり得る背景は何か？

4.1 終止用法と非終止用法

- 南 (1964, 1974, 1993) の整理と、それを元にした尾上 (2001) を私に整理。
- (7)
- ケーキを食べさせ {つつ／るので／るが} 紅茶を淹れ {る／ない}。
 - ケーキを食べた {*つつ／ので／が} 紅茶を淹れ {る／ない}。
 - ケーキを食べるだろう {*つつ／*ので／が} 紅茶を淹れ {る／ない}。

表 1 現代語の包摂可能性 (尾上 2001)

	ナガラ・ ツツ	テ (情態修飾)	タラ・ト	バ・ タラ・ト	(ノ) ナラ・ ノデ・ ノニ・ テ (並列)	ガ・カラ・ ケレド・シ
動詞・ (サ) セル・(ラ) レル	○	○	○	○	○	○
ナイ	×	○	○	○	○	○
テイル	×	×	○	○	○	○
ヨウダ・ソウダ (様態)	×	×	×	○	○	○
タ・ラシイ	×	×	×	×	○	○
ウ・ヨウ・ マイ・ダロウ	×	×	×	×	×	○

- 一方、古代語の小田 (1990・1994・2015) の整理。

表 2 小田 (2015 : 76)

	つつ	て	とも	未ば	已ば	ども
動詞	○	○	○	○	○	○
I (さ) す・(ら) る	○	○	○	○	○	○
II 連体なり・べし・まじ・まほし・ず	×	○	○	○	○	○
III ぬ・り・つ・たり	×	×	○	○	○	○
IV き・まし	×	×	×	○	○	○
V けり・めり・終止なり	×	×	×	×	○	○
VI む・らむ・けむ	×	×	×	×	×	○
終助詞	×	×	×	×	×	×

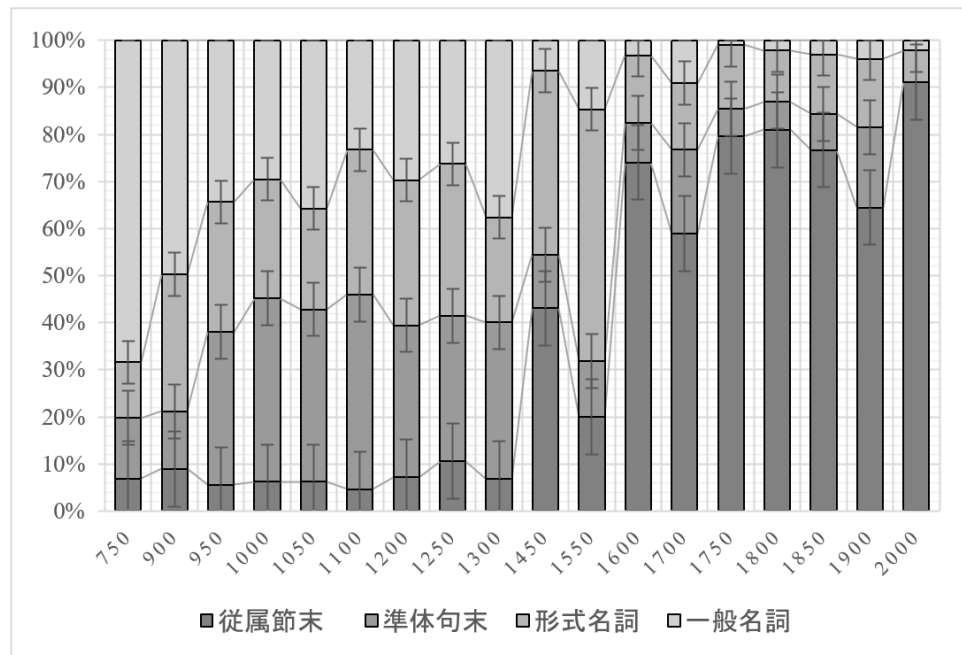
- これを比較する限りでは古代語と現代語はよく似ていて、歴史を通して一定するようにも見えるが…

- (8)
- これも前の世のことならめ**ば**、かかる筋にて (とりかへばや物語・小田 2015 : 77)
 - スルニ、カタカラウホドニ云ワウニモ**詔**(カタウ) ナウテハカナウマイゾ。
(史記抄・弟子列伝 [1477] 3-132-14)
 - サウダニアラウナラ**バ**、死ナウヲモ、ナントモ思ワヌゾト云ゾ。
(史記抄・秦本紀 [1477] 1-325-5)
 - 出るならば予が世話してやらふの**に**と贅か知らんがいふてで有つたわいなあ

- そのことを踏まえてとりあえず計量してみると、やはり一様な推移ではない（北崎 2019c）。

表 3 非終止用法の内訳

	年代	従属節末	準体句末	形式名詞	一般名詞	総計
上代	750	35 / 6.92%	65 / 12.85%	60 / 11.86%	346 / 68.38%	506
	900	16 / 8.94%	22 / 12.29%	52 / 29.05%	89 / 49.72%	179
中古	950	24 / 5.57%	140 / 32.48%	119 / 27.61%	148 / 34.34%	431
	1000	168 / 6.23%	1049 / 38.92%	682 / 25.31%	796 / 29.54%	2695
	1050	7 / 6.25%	41 / 36.61%	24 / 21.43%	40 / 35.71%	112
前期	1100	32 / 4.69%	282 / 41.29%	210 / 30.75%	159 / 23.28%	683
	1200	25 / 7.20%	112 / 32.28%	107 / 30.84%	103 / 29.68%	347
	1250	23 / 10.60%	67 / 30.88%	70 / 32.26%	57 / 26.27%	217
中世	1300	22 / 6.83%	107 / 33.23%	72 / 22.36%	121 / 37.58%	322
	1450	325 / 43.10%	86 / 11.41%	294 / 38.99%	49 / 6.50%	754
後期	1550	94 / 20.00%	56 / 11.91%	251 / 53.40%	69 / 14.68%	470
	1600	623 / 74.08%	71 / 8.44%	120 / 14.27%	27 / 3.21%	841
前期	1700	162 / 58.91%	49 / 17.82%	39 / 14.18%	25 / 9.09%	275
近世	1750	82 / 79.61%	6 / 5.83%	14 / 13.59%	1 / 0.97%	103
	1800	149 / 80.98%	11 / 5.98%	20 / 10.87%	4 / 2.17%	184
後期	1850	230 / 76.67%	23 / 7.67%	38 / 12.67%	9 / 3.00%	300
近代	1900	49 / 64.47%	13 / 17.11%	11 / 14.47%	3 / 3.95%	76
現代	2000	164 / 91.11%	0 / 0.00%	12 / 6.67%	4 / 2.22%	180



- ここから拾える現象、
(9) a. ガ節・ホドニ節において、マイの生起がウに先行する→資料 B
b. 確定条件節において、中世・近世に意志のウ類（らしきもの）が生起できる→資

料 A

- c. (↑も踏まえつつ、) カラ節はもと B 類、ノニ節は C 類など、時代による異なりがある→資料 D

4.2 中世後期における取り込み

- ガはもともとウを包摂せず、マジが早い。史記抄ではウは僅少で、ウズ・マイに偏る。

(10) a. 他人ノ勢アル者ナラバ、吾ウデニテハエ殺スマジキガ、伯寮ニ於テハ吾力ニテナリトモ、子路ガ罪ナキヨシヲ季孫ニ聞テ市朝ニ殺シテノケント云。
(応永本論語抄・論語憲問第 14 [1420] 589-1)

b. 御目ニカ、リテ、以前ノ劾奏シタ事ヲ、謝セウスルカ、ナントシテ、見エウスヤラウトモ、未知也。又ハツコマウカナントセフソト思ソ。
(史記抄・張馮列伝 [1477] 4-109-14)

c. 賦ト云ハ、臨時ノ科役ソ。田畠カアラハ公事ヲセウカ、山有銅鑄錢煮海水為塩ホトニヘシテ公事モナイソ。
(史記抄・呉王濞列伝 [1477] 4-229-16)
- ホドニもまた、マイが早く、ウが遅い。史記抄ではウは僅少で、ウズ・マイに偏る。

(11) a. 文王ヨリ後ニ死ベキホドニ孔子ノ我身ヲ後死者ト云ル也。
(応永本論語抄・論語子罕第 9 [1420] 392-1)

b. 有若答云、上ヘ十分一ヲトラバ百姓ガ業ヲステマジキホドニ家々皆富貴スベシ。民富貴セバ君ノ用ニコトヲカクマジホドニ君モ可足。
(応永本論語抄・論語顔淵第 12 [1420] 502-9)

c. 今日以後ハキズツクコト有マイホドニ我身ヲ不毀傷シテ、不孝罪ヲ免タリト云。
(応永本論語抄・論語泰伯第 8 [1420] 360-4)

(12) a. マ、子ノ立レウズホドニ、カウシテ我が天下ヲハカラワウトテゾ。
(史記抄・呂后本紀 [1477] 2-188-4)

b. スルニ、カタカラウホドニ云ワウニモ^{カタウ}認ナウテハカナウマイゾ。
(史記抄・弟子列伝 [1477] 3-132-14)
- このマイ・ウの時期のずれを、条件形式側から説明するのは難しい。マイがマジイとベイの合いの子であることを踏まえれば、マイは肯否ではウと対立するものの、意味的にはウよりも広いベシ系の意味を引き継ぐので、マイを橋渡しに肯定のウも生起できるようになったと考えるのがよい(下図)。

	肯定		否定
ベシ系	ベキガ	↔	マジキガ
ム系	*ムガ	↔	*ジガ
↓			
	肯定		否定
ベシ系	ベキガ	↔	マジキガ
	↓		↓
	ウズ(ル)ガ	↔	マイガ
			↓
ウ系	ウガ	←	マイガ

図1 取り込みの過程

4.3 意志のウの生起

- ウが生起可能になった確定条件節において、意志のウ類らしき例が見えるという点が現代語と相違する。

- ガ・カラ・ケレド・シ・ホドニのいずれにも例が一定数あり、特に、カラの場合は近世後期という比較的遅い時期に見られるようになるという点で、注目される。

- (13) a. 身共がくふたらば代物をやらふが, おのれがものを, おのれとくらふて, 身共にだせとはなんと (虎明本・饅頭・40- 虎明 1642_02030,11620)
- b. [合巻を] みんなおめへに。あげやうから。よんでみな 中にやあ。愁れにおもしろいのも有やせう (花街鑑・52- 洒落 1822_01062,56850)
- (14) a. 私が食ったのなら代金を [* 払おうが / 払うが / 払おう。だが], お前の物をお前と食って, 私に代金を払えとはどういうことだ。
- b. みんなお前に [* あげようから / あげるから / あげよう。だから], 読んでみな。

- 以下の比較に基づけば、たしかに意志であると言えそう。

① 虎明本・虎寛本ともにウで示す場合 (31-33 例)

- (15) a. [出家] …ここに某に, にあふたまいがある, まはふほどに, はやいてくだされひ, (虎明本・地藏舞・40- 虎明 1642_06003,18640)
- b. (シテ) 夫成らば爰に私に似合ふた舞が御座る。是を舞ませう程に, こなたは囃いて被下い。 (虎寛本・地藏舞・下 70-8)

② 虎明本がウ+従属節で示す箇所を, 虎寛本では基本形で示す場合 (4-6 例)

- (16) a. [亭主] …それならば, 大法をやぶつて宿をかさう程に, おくへとおつて, ゆるりといさしめ (虎明本・地藏舞・40- 虎明 1642_06003,11060)
- b. (アド) 大法を破て宿をかす程に, 寛りと休ましめ。 (虎寛本・地藏舞・下 68-3)

③ 虎明本がウ+従属節で示す箇所を, 虎寛本ではウ+ト+思考動詞で示す場合 (4 例)

- (17) a. [大名] 「扱国本へ追付くだらふが, さりながら, 在京のあひだあふた人に, いとまごひして下りたひと思ふが, 何とあらふぞ

(虎明本・墨塗・40- 虎明 1642_02004,680)

b. (シテ) …扱夫に付、明日は国許へ下らうとおもふが、彼の人の方へ暇乞にいた物で有うか、
(虎寛本・墨塗・上 292-6)

④ 虎明本がウ＋従属節で示す箇所を、虎寛本では複文で示さず、意志文と後続文の2文で示す場合 (10例)

(18) a. [茶屋]「もつはづならばもたせう程に、先おまちやれ

(虎明本・犬山伏・40- 虎明 1642_03019,6950)

b. (茶や) 持せて能事成らば私が持せませう。先是を私へ預けさせられい。

(虎寛本・犬山伏・中 470-9)

• カラが近世前期にウ類を包含せず、近世後期になってウカラが現れることまで含めて説明をしたい。

(19) 中世後期において未だ義務的であったウによる非現実事態の標示は、近世には積極的には行われなくなったが、意志・推量を表す場合においては引き続きウの生起が可能であり、カラにも新たにこれが適用された。

• これを踏まえるならば、以下の3段階が想定できる。

(20) A 中世後期のウは、非現実的事態を表す場合に従属節・連体修飾節内に義務的に生起し、それが意志と解せる場合もあれば、実際に意志を表す場合もあった。

B 近世においては、従属節・連体修飾節内での未来(非現実)の標示は義務的ではなくなったが、前代のものを引き継ぐ形で、引き続き推量のみならず、意志も生起できた。

C 近代において、意志のウは従属節末での生起が容認されなくなり、主節末専用形式になる。

→文構造の側から見たとき、意志のウを従属節に包含できなくなったというのは大きい？

4.4 近世を中心とする従属節の階層性

• CHJ 江戸時代編を対象に、「助動詞」(と意志推量形) + 「従属節を構成する形式」の連続を抽出して整理する。

表4 近世語の従属句の階層性¹

	サセル	ラレル	待遇	ズ・ヌ	ナイ	タ	ウ	マイ	ダロウ
ナガラ (非逆接)	△	○	×	×	×	×	×	×	×
ツツ	○	○	×	×	×	×	×	×	×
ド・ドモ	△	○	○	○	×	×	×	×	×
テ	○	○	○	×/○	×/○	×	×	×	×
ト(順接)	○	○	○	○	○	×	×	×	×
ナガラ(逆接)	○	○	△	○	△	×	×	×	×
已バ	○	○	○	○	○	×	×	×	×
ノデ	△	△	○	○	○	○	×	×	×
未バ	△	○	○	○	○	-	×	×	×
タラ	○	○	○	△	○	-	×	×	×
ニヨッテ	△	△	○	○	△	○	×	×	×
サカイ	△	△	○	○	○	○	×	×	×
ト(モ)	△	○	○	○	△	○	○	△	×
ホドニ	○	○	○	○	○	○	○	○	×
ナラ	○	○	○	○	○	○	○	○	×
ノニ	-/△	-/△	-/○	-/○	-/○	-/○	-/○	-/○	-/○
ガ(確定)	○	○	○	○	○	○	○	○	○
カラ	△	△	?	?	?	○	×	×	×
ケレド(モ)	×/△	×/○	×/○	×/○	×/○	○	○	○	○
シ	×/○	×/○	×/○	×/○	×/△	×/○	○	○	○

- 歴史的な異なりの整理。

- (21) a. 中世後期から近世後期にかけて…テ・カラ・ケレド・シ
 b. 近世から現代にかけて…ナラ・ノニ

- (22) a. テ：否定+テが近世後期に出現（それまでは連用形やズニが担う）。
 b. カラ：成立時にはB類、近世後期にはC類に。
 c. ケレドモ：マイケレドモから分出され、対立するウと、その後他形式にも波及。
 d. シ：マイシから分出され、対立するウと、その後他形式にも波及。
 e. ノニ：成立時にはC類要素まで含むが、現代に至る過程でB類に。
 f. ナラ：中世後期にはC類要素まで含むが、現代に至る過程でB類に²。

4.5 意味変化の一方向性

- 意味変化の一般的な傾向として「主観化」「間主観化」((inter)subjectification, Traugott & Dasher 2002) のあることが指摘される。

1 前期・後期で様相の異なるものを「/」で区切る。「-」は形式の成立時期や形態的な問題により、そもそも現れ得ないもの、「△」は今回の範囲では用例が見られなかったが、存在することが期待されるもの。

2 ただし、おそらく仮定条件の制約下でしか働かないので「C類」という整理はそもそもしないほうがよいが、便宜的にこうしておく。

- (23) a. meanings are recruited by the speaker to encode and regulate attitudes and beliefs (subjectification), and,
 b. once subjectified, may be recruited to encode meanings centred on the addressee (intersubjectification).
 c. non-/less subjectivized > subjectivized > intersubjectivized (Traugott 2010 : 35-36)

- 「命令形式の条件形式化」はこの反例 (小柳 2016a)。
 - 意味的には命令の意を喪失しつつ、統語的には主節末から従属節末へと位置が変化する。
- 「主観化」もまた、意味変化に伴い主節末に生起位置が固定されるタイプの変化。当該形式が推量・希望・疑問などの意を失うとき (主観化の逆)、生起位置は主節末から離れる (cf. 青木 2011, Kinuhata 2012)。

- (24) a. まごじょーなでけなさったげななー (青木 2011 : 122)
 b. なんて数学げなせないかんとー。 (青木 2011 : 122)

- (25) a. 何ト義理ヲ付ウズヤラ知ラヌホドニ (蒙求抄卷 4 [1529] 高宮 2004 : 118)
 b. されば何と申事で御ざるか存ませぬ。(虎寛本狂言・八幡前 [1792 写] 高宮 2005 : 102)

- (26) a. わがごとく我を思はむ人もがなさてもや憂きと世をこころみむ
 (古今和歌集 [906] 20- 古今 0906_00016,2590)
 b. <ただの受領のよからむをがな>とこそ思ひつるに、まして上達部にあなり。
 (落窪物語卷 4 [986] 20- 落窪 0986_00004,104770)

- c. 此ノ女、「何ヲガナ形見ニ嫗ニ取セム」ト思ヒ廻スニ、〔何か形見に老婆に与えよう〕
 (今昔物語集卷 16-9 [12C 初] 30- 今昔 1100_16009,12690)

- (27) a. ねだれ者かしらぬ、粗相すな (夕霧阿波鳴渡 [1712 演] 51- 近松 1712_08001,13580)
 b. 弥次「かまうこたアねへ。なんでも持出しさへすりやア、どこかしら寺があるだろう (東海道中膝栗毛 [1802 刊] 42-7)

- (28) a. 随意ニ今日ハ寒ハ暑ハ雨ガフルハ風ガ吹ハナドイワヌゾ
 (蒙求抄卷 2 [1529] 52 オ 10)
 b. 年末のカウントダウンイベントで年明けにビールかけあいました。真冬なので帰りに相当寒いわ、ビール臭いわで、結局風邪引いて・・・楽しいけど、2度と参加したくない感じです。
 (Yahoo! 知恵袋 [2005] OC08_04786,1420)

- 意味変化と統語変化は本質的には別個の変化であるが、意味と統語的な位置が関係性を持つ場合、2つの変化も必然的に関係性を持つか？
 - 命題的意味が文内部に、表出的意味・对人的意味が文の周辺に配置される日本語においては、主観化・間主観化と、文末に生起位置が固定されるタイプの機能変化はパラレル。

5 まとめ

- 以上のことを踏まえて再展望。

5.1 いわゆる「開いた」「閉じた」の再検討

- 日本語の文構造の変化に関して、近代語に至る過程に「従属節の自立性の弱まり」が指摘されることがある (cf. 阪倉 1970)。
 - (現代語の埋め込み文において相対時制の性質が強いこと、ウ類を用いることができないことについて)「文の様相的な意味を主文でまとめて表そうとする性質が強い現代共通語の性質」(金水 2011: 115)
 - 「かつて節と節が、あるいは文と文が、緩やかに自立性をもって並列していたのに対し、近世期以降、相互に緊密な関係において、文としての一本的まとまりが強められる流れがあったのではないか」(矢島 2013: 441)
 - 古代語の不十分終止の一部に「現行の句読点のシステムでは、これを適切に示すことができない」ものがあることの指摘 (小田 2006: 30)。
- 複数の文が1文として再解釈されやすい素地は、ここにあるか？

(29) a. 連体形係り結びの成立 (野村 1995, 鴻野 2010)
 […カ]。[連体形終止文 …連体形]。 → [[[…カ]、[…連体形]]]。

b. 間接疑問文の成立 (高宮 2004)
 […ヤラ (ウ)]。[後続文 …]。 → [[ヤラ (ウ)] […]]。

c. 命令形式の条件形式化
 […命令形]。[後続文 …]。 → [[条件節 命令形]、[主節 …]]。

d. 不十分終止 (小田 2006)
 […終止形]。[後続文 …]。 → [[[…終止形]、[…]]]。

かしこに人もなし、渡りたまひね。 (落窪物語)
- 一方で、室町時代以降に見られる、トコロガ・ケレドモ・ガなどの、接続助詞の異分析による接続詞の発達 (小柳 2016b) は、文の切れ目への意識の高まりを窺わせ、連体形係り結びの衰退も、「文の中心での疑問形式の生起」という、一般的な文の階層に反する現象を避ける動きとして捉えられる。

5.2 階層構造の歴史の一般化

- 成立時とその後で、従属節の機能が違うことがままあるが、このことは一般化可能か？
- 順接確定条件は階層を分担する傾向がある？
 - ホドニ (B → C) とニヨッテ (B)
 - カラ (B → C) とノデ (B)
- 逆接確定条件はC類を志向？
 - ドモ (C) ・ケレドモ (C)
 - ガ (B → C)
 - ニ (C) ※ただし、ノニ (C → B)
- 仮定条件は「主節でまとめる」傾向へ？
 - ナラ (C → B)
 - ※「～うと」「～うものなら」などは複合辞化して残る (ただし、意志・推量は取らない)

参考文献

- Kinuhata, T. 2012. Historical development from subjective to objective meaning: Evidence from the Japanese question particle ka. *Journal of Pragmatics* 44, 798-814.
- Traugott, E. C. 2010. (Inter)subjectivity and (inter)subjectification :A reassessment., Davidse, K. Vandelanotte, R. Cuyckens, H(eds.). *Subjectification, Intersubjectification and Grammaticalization*, Berlin: De Gruyter Mouton. 29-71.
- Traugott, E. C. & Dasher, R. B. 2002. *Regularity in Semantic Change*. London: Cambridge University Press
- 青木博史 (2011) 「日本語における文法化と主観化」澤田治美 (編) 『ひつじ意味論講座 5 主観性と主体性』ひつじ書房, pp.111-136.
- 小田勝 (1990) 「中古和文における接続句の構造」『国学院雑誌』91(8), pp.38-47.
- 小田勝 (1994) 「接続句の制約からみた中古助動詞の分類」『国学院雑誌』95(7), pp.16-25.
- 小田勝 (2006) 『古代語構文の研究』おうふう.
- 小田勝 (2015) 『実例詳解古典文法総覧』和泉書院.
- 尾上圭介 (2001) 『文法と意味 I』くろしお出版.
- 北崎勇帆 (2019a) 「「～(よ)うと」の一群の成立と展開」『日本語文法』19(1), pp.3-19.
- 北崎勇帆 (2019c) 「命令形式から条件形式へ」『国語と国文学』96(7), pp.52-66.
- 北崎勇帆 (2019d) 「意志・推量形式の終止・非終止用法の推移」『高知大国文』50, pp.1-17.
- 金水敏 (2011) 「統語論」金水敏・高山善行・衣畑智秀・岡崎友子 『シリーズ日本語史 3 文法史』岩波書店, pp.77-166.
- 鴻野知暁 (2010) 「ゾの係り結びの発生について」『国語国文』79(12), pp.37-54.
- 小柳智一 (2016a) 「対人化と推意」『国語研究』79, pp.左 71-84.
- 小柳智一 (2016b) 「文法変化の方向と統語的条件」大木一夫・多門靖容 (編) 『日本語史叙述の方法』ひつじ書房, pp.55-73.
- 阪倉篤義 (1970) 「「開いた表現」から「閉じた表現」へ—国語史のありかた試論—」『国語と国文学』47(10), pp.22-35.
- 高宮幸乃 (2004) 「ヤラ(ウ)による間接疑問文の成立—不定詞疑問を中心に—」『三重大学日本語学文学』15, pp.124-110.
- 高宮幸乃 (2005) 「格助詞を伴わないカの間接疑問文について」『三重大学日本語学文学』16, pp.104-92.
- 野村剛史 (1995) 「カによる係り結び試論」『国語国文』64(9), pp.1-27.
- 南不二男 (1964) 「複文」森岡健二・永野賢・宮地裕・市川孝 (編) 『講座現代語 6 口語文法の問題点』明治書院, pp.71-89.
- 南不二男 (1974) 『現代日本語の構造』大修館書店.
- 南不二男 (1993) 『現代日本語文法の輪郭』大修館書店.
- 矢島正浩 (2013) 『上方・大阪語における条件表現の史的展開』笠間書院.

